

2020年度 一般入試前期日程 小論文（図表理解） 出題の意図と解答の傾向

図表理解の出題にあたっての意図としては、2つのポイントがあった。図表から読み取れる知見を素直にとらえ、問題文が指示する内容に従って簡潔でよいので明解に記述すること。もう一つは、社会現象を経済学の視点から捉えるにあたって、得られたデータや図表から、経済学における重要な概念である需要と供給という概念を理解して、その面から考察することである。

【出題の意図】

大学卒の生涯所得と高卒の生涯所得に格差があることは、周知の事実であり、高校卒業後に機会費用を払ってまで大学進学・卒業を目指す理由の一つとして説明が行われてきた。しかし、国際間（特に先進国）で比較すると、その傾向は海外でも見られるものの、ICTが発達するようになってからは海外では高卒大卒間の生涯所得格差が広がる一方、日本ではその格差に大きな変化がないことは、あまり知られていない。この理由について労働需要と労働供給から問うたものである。

<設問1>

【解答のポイント】

図表1から3までのデータから読み取れる内容について、設問で指示されている「大学数」と「大学生数」（大学入学者数）と「大学卒者数」について、指定字数の範囲内でまとめることである。図表1から3の各ポイントは、下記ようになる。

- ・図1：大学数は1955年から2010年頃まで増加傾向にあったが、2010年前後から800校弱で横ばいで推移している
- ・図2：大学生の数（大学入学者数）は1960年以降増加し、2010年頃まで増加している。
- ・図3：大学卒の人数も1955年以降2009年ごろまで増加してきている。

【答案の傾向】

全体的に答案の多くが、大学数、大学入学者および学卒就業者の増加傾向を指摘して、正確かつ適切に回答していた。個別の図表についてと、課題は下記ようになる。

- ・図1については、ほとんどの受験者が適切にグラフを読み取っていた。
- ・図2についても、多くの受験者が適切に読み取っていたものの、一部、高校等卒業者数を中心に回答しているものがあった。「大学生の動向」について問うているので、質問とのずれが生じていた。
- ・図3は、就職者数と大学進学率の二つの数字が混在しているため、読み取りが難しかったようだ。学歴別就職者数の「大学卒」については、図の左側のメモリをあてはめるべきだが、右側の%と混同している回答が多かった。その結果、大学進学率は高くなっているが、大学卒の割合は低下しているといった趣旨の回答が多く、設問2の回答にも影響することになっていた。

全般的には、「動向について説明しなさい」、つまり「時系列の動きの特徴を説明しなさい」とあるにも関わらず、三つの図から「どのようなことが言えるのか」つまり「推論をしなさい」と設問をとりちがえた受験生が圧倒的に多かったことである。したがって結論めいたものとして「学歴社会となった」「目的を持たずに大学に入学するようになった」等の記述を含んだ解答が

圧倒的に多かった。また、図表の中の最近の動向だけに焦点をあてての回答も多かった。

<設問 2-①>

【解答のポイント】

図 4、図 5 のグラフの特徴を理解し、解説文で示される内容から、労働需要、労働供給のそれぞれの内容を論理的に説明できるか、を問う問題である。

図表および解説文から理解できる内容と回答のポイントは以下のようになる。

- ・図 4 で理解できることは、日本は 1980 年も 1992 年も欧米諸国よりも学歴間賃金格差が小さいこと。また日本の 1980 年の賃金格差は欧米諸国が広がっているにも関わらず、1992 年でも広がっていないこと（ほぼ差がない）
- ・図 5 で理解できることは大卒者の生涯所得はほぼ 120～140 でほぼ横ばいであることから、高卒者との学歴間賃金格差が広がっていったこと
- ・「解説文」から、理解できることは、「コンピューターを中心とする技術革新は、・・・コミュニケーション能力やビジネスモデルを考える力を持った人材に労働需要をシフトさせた。・・・こうした能力は一般的に高学歴者の方が高い」ので、高学歴者の労働需要が高まり、高学歴者の賃金は高くなったはずということが類推できる。
- ・労働需要の要因：「解説文」から、（コンピューターを中心とする技術革新で）大卒者への労働需要が大きくなり、大卒者の賃金には上昇要因となったはず、ということ述べればよい。
- ・労働供給の要因：図 1 から 3 で見たように、大学生の数、大卒者の数が増えていった。これは大卒者の労働供給が増加してきたことを示す。大卒者の労働供給が増加したために大卒者の賃金を低下させるように働いたこと
- ・両要因の結果、学歴間賃金格差が広がっていないのは、コンピューターの技術革新のため、大卒者への労働需要は増えて賃金上昇要因となったと考えられるが、大卒者が増加したため、大卒者の労働供給が増加し、賃金低下要因となったために、結果として、高卒者の賃金との賃金格差は広がらず、そのまま横ばいで推移した。

【答案の傾向】

差のつく設問であった。一つ一つの図表や解説文が示唆する内容を読み取れていない答案や読み取ってはいても意味を取り違えている答案、全体的な構成ができていない答案が散見された。

誤った思い込みをしてしまい、この思い込みに基づいて解答した答案も多かった。その思い込みとは「日本で学歴間賃金差が生まれにくいのは、高学歴者の資質に問題があるからだ」というものである。需要と供給という量の動きで解答しなければならないものを、労働の質の問題として解答してしまっていた。したがって解答の傾向としては、「先進国の労働需要シフトに対して、日本ではこのシフトに適合できる高学歴者がいないので学歴間賃金格差が生じない」というような解答が圧倒的に多かった。また、別の思い込みとして「欧米諸国では技術革新によって労働需要のシフトが起きたが、日本は技術革新が遅れているので（解説文でわざわざカッコ書きでそうではないとしているにもかかわらず）労働需要のシフトは起きていない」というものである。このため、「高学歴者が定型労働に従事するので学歴間賃金格差が生じない」というような解答も多かった。

もちろん、よく理解し明解に説明できている答案も少なからずあった。その他、個別に気づいた点について付言する。

- ・諸外国と比べて日本の学歴間賃金格差が小さいという図 4 と図 5 の内容の把握については比較的多くの受験生が理解できていた。
- ・解説文の内容と設問 1 の内容については、解説文を丸写ししたものが少なくなかった（字数が限られているため、あまり評価できるものではない）。
- ・設問 1 で「大学進学者が増加している」と答えたにも関わらず、その内容を踏まえていない答案が少なからず見られた。
- ・労働需要と労働供給それぞれの要因に分ける点については、この部分を見落として 2 つの要因について全く触れていない答案が多かった。
- ・需要と供給の意味を逆に捉えている答案も多く存在した。すなわち、「労働需要」は労働者が提供する労働サービスを需要することを意味し、主に雇用者（企業など）の需要を指す。「労働供給」は労働サービスの供給を指し、労働者が提供するものである。この意味を逆にとらえているために論理的な文章にならない答案が多かったということである。

<設問 2-②>

【解答のポイント】

技術革新が広がる現代で、大卒者に求められる能力について、図 6 で示されるグラフの特徴を理解し、それをを用いて、回答者の意見を問う問題である。このため、図 6 を理解し、きちんと正確に用いているのか、自らの考えを論理的に述べているかどうか、がポイントとなる。

【解答の傾向】

図 6 の解釈としては、以下の 3 つのタイプが多かった。

- ・「役に立ったとの回答が多かった力」を大卒者に求められる能力であるとみなし、それらの力を伸ばす。
- ・「役に立ったとの回答が少なかった力」でも大卒者に求められる能力であるとみなし、それらの力を伸ばす。
- ・「役に立ったとの回答が少なかった力」については、授業以外のところ（フィールドワークや留学など）での補強が必要である。

個別には、図 6 の「専門分野に関する知識経験」等の項目の解釈については、

- ① 項目のことを、大学の授業で自分の能力を形成するにあたりどの程度役立ったものであるかを意味していると解釈した解答。
- ② 項目のことを、大学卒業後に社会で活躍するにあたって役立つものであると解釈して記述する解答。

が多かった。

答案の傾向としては、以下の 3 つのパターンが多かった。

- ・コンピューターを上手く活用するために、「専門分野に関する知識経験（役に立ったとの回答が多かったもの）」が必要であるとする解答。
- ・コンピューターができないことを人間が行うために、上記以外の能力（例えば「人にわかりやすく話す力」「ものごとを分析的・批判的に考える力」など、いずれも役に立ったとの回答が少なかったもの）がむしろ必要であるとする解答。
- ・さらにコミュニケーション能力を外国語の能力とみなして、外国語（特に英語）教育のあり方に関して持論を展開している解答。

【まとめ】

文章の構成や読みやすさ、説得力の程度は、回答者により程度の差はあったが、特に設問2-①では、出来不出来が大きく開く結果となった。中には出題者の意図を明確に把握し、正確な図表理解と論理構築を行い、簡潔に説明できている答案も散見された。ただし、一部では最初から、問題文の意味や図表をきちんと理解をせずに、準備してきたキーワードや論調を強引にあてはめて、解答しているだけの残念な答案もあった。

最後に文章作成上では、誤字やことばの誤用もあった。「分野」や「専門」と書くべきところを「文野」、「専門」と誤字を当てている答案が目立った。